

【要旨】滝沢克己とドストエフスキー——西田の宗教論を手引きとして

石井 砂母亜 (跡見学園中学校高等学校)

日本のドストエフスキー受容に見られる顕著な特徴は、原典にあたっているわけでもないロシア文学の素人による研究（小林秀雄、森有正、唐木順三等）が、ドストエフスキー研究の分厚い層を支えてきたことである。ドストエフスキーの名が日本に初めて紹介されたのは 1889 年、それ以降、大正期を除いていずれも社会状況の激動期か閉塞期に熱狂的に受け入れられてきた。いわば日本における「危機の時代」に、理性の通用しなくなった生の領域において、ラスコーリニコフやイワン・カラマゾフ、地下生活者に自らを重ね合わせ、ドストエフスキーに「憑かれた人」として文芸評論が行われたのである。こうした文芸評論は、小林秀雄も含めていずれも「復活したラスコーリニコフ」を受け入れる研究にはなりえなかったという。本発表で滝沢克己を取りあげるのは、彼がドストエフスキーに「憑かれた人」のそれではなく、「復活したラスコーリニコフ」へと焦点を合わせて思索したからである。

ドストエフスキーが生涯苦しんだ問題は二つある。神をめぐる問題と、彼が生きた 19 世紀の近代に関わる問題である。『カラマゾフの兄弟』のイワンが「神がいなければ、すべては許される」と語るように、ドストエフスキーは神なき世界においてどこまでも傲慢に神の位置に自らを据え自由を行使する人間が、まさにそれゆえに破綻せざるを得ない現代の危機を予言してみせている。近代資本主義と科学技術の行き着く「虚無」を自覚しながらも、神を否定した人間はそこから逃れる術を知らない。ドストエフスキーが凝視した虚無との対決は、自ずとわれわれを「神」の問題へと導くのである。また、ロシアと日本の近代化の過程は、国家権力により推進された外発的近代化と、異質な西欧文化の導入・同化という点で類似しており、それゆえ近代化がもたらす問題も両国で共通している。日本におけるドストエフスキー研究の多くが、神なき世界における近代化の矛盾とそこに巢食う悪霊に憑かれた人間に焦点を当てて展開されるが、滝沢はそのなかで虚無という薄暗さを超えて生命の根底で輝く「Immanuel (神、我らと共に)」という一つの光点を、深い闇のなかでのキリストの接吻として力強く描き出すのである。

滝沢が『ドストエフスキーと現代』という著作を刊行したのは 1972 年である。同書は滝沢自身が位置づけるように『私の大学闘争』（1972 年）の第 4 部に収録される予定のものであった。滝沢がドストエフスキーを通して明るみに出そうとしたのは、自由と社会変革を求めて権力と対峙した学生運動が「連合赤軍派」の憂鬱な事件と化し、それを世間がこぞって「愚かさ」、「兇暴さ」、「非人間的な冷酷さ」と一斉糾弾したその事実にある。ドストエフスキーが描き出す革命の悪鬼たちは悪霊に憑かれた人間であり、滝沢もまた神なき世界における悪霊にその問題意識を向けている。しかしこの悪霊は革命の悪鬼のうちだけではなく、それを嘲笑するわれわれのうちにも巢食っているのである。滝沢は、われわれのうちに「ドイツ人の《Schadenfreude》と呼ぶあの快感、どこか薄暗い自己満足」が忍び込んではいないかと強調する。大学闘争が向かいゆく残酷さと、いわゆる世間の Schadenfreude は根を一つにしている。現代社会に巢食う悪霊は「人間存在の根元に横たわる或大切な一事を無視して、自己の繁栄や武力や、良心や知性や勇気を誇ってきた、その避けがたい結果」としてもたらされたのである。

本発表では、大学闘争が暗転するその残酷さ（悪霊）とそれに対する世間の Schadenfreude（悪霊）が人間の内奥に横たわる「薄暗い自己満足」であることを滝沢と共に提示し、その一つの事例として「桐島聡」の存在によってメディアで報道された東アジア反日武装戦線の爆破事件とそれに対するマスコミの反応を概観する。その上で、二重の悪霊がまさに現代を映す問題でもあることを確認しながら、ドストエフスキーと共に滝沢が示した「薄暗い自己満足」（悪霊）を超克しうる道を、西田の宗教論、とくにそのドストエフスキー解釈を手引きとして考えていきたい。